

# 小田原史談

第 137 号

発行所 小田原史談会  
小田原市本町1-6-20

## 碧い海を眼下に 福田正夫の詩碑が 江の浦昌満寺に生れる

郷土小田原が生んだ詩人、福田正夫の詩碑が、このたびゆかりの江の浦昌満寺境内に建てられ、さる四月二十三日にその除幕式が挙行された。この日はあいにく荒れ模様の天候であったが、著名な作家井上靖氏を交えた多くの関係者が列席して意義深い半日であった。

周知のように福田正夫は明治二十六年三月二十六日、小田原市南町の医師堀川好才の五男として生まれ、のちに福田家の養子となった。彼は

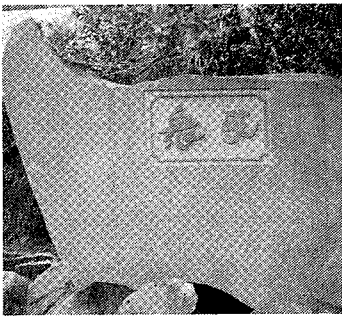
福田正夫



神奈川県立師範学校在学中より、詩歌を愛好、同時に詩の創作に熱中した。

大正二年根府川小学校に職を奉じ大正五年には処女詩集「農民の言葉」を自費出版した。やがて中央詩壇にも多くの知友を得、大正七年には小田原在住の詩人を糾合して詩誌「民衆」を主宰創刊した。彼は明治中期より勃興した文語による抒情新体詩に強い反発を覚え、口語による作詩

民衆碑 小田原城址



を試み、抒情よりもっと社会性のある分野に進もうとした。そのため福田碎花、白鳥省吾、井上康文らと共に「民衆派詩人」と呼ばれた。折しも大正デモクラシーの上昇期にあたり、新しい文化の旗手としてもはやされた。

しかし当時は「社会」とか「民衆」という語そのものに、いまだ強いアレルギーのあった時代で、福田らの意図した詩は遂に実を結ばなかった。彼は再び抒情に戻り、郷土の風物を美しく歌った。

水の浅瀬に早川の  
流れそそぐや朝の海

これは早川の久翁寺に建つ彼のもう一つの詩碑の一部である。こんど詩碑の建った昌満寺も亦、明るい丘上にあり、その詩の

一人の人が  
海ぞひの路をすたすた行く  
すたすたと

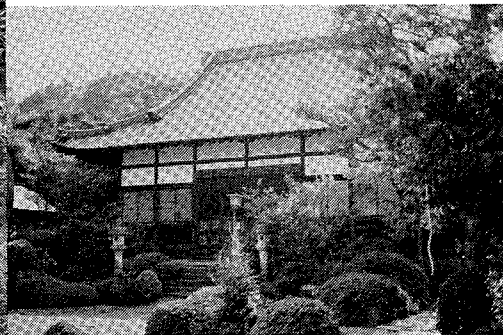
と詠まれたように彼、福田正夫は

永遠に碧い海ぞひの路を歩いているのであろう。  
なお小田原市民が今も唄う「小田原音頭」

ああ相模来て見りや海さへ燃える  
浜のみゆきにや砂の文字  
どどんと小田原海どころ  
これは彼の晩年の作である。

(高田喜久三)

江の浦昌満寺



福田正夫 詩碑



明治以後 小田原劇場物語(三)

石井富之助

内容

- 一、劇場附寄席
- 1 桐座 (一三五号)
- 2 富貴座 (一二六号)
- 3 鶴座 (一三六号)
- 4 御幸座 (本号)
- 5 寄席 (本号)
- 二、映画館
- 三、演劇雑記 (次号以下)

四 御幸座  
御幸座は大正八年九月、新玉二丁目の御幸町に建設された。

ここは元小田原藩の牢屋があったところで、先に述べたとおり川上音次郎もこの牢屋に収容されたのであるが、そのためにここをひとびとは牢屋といっていた。大正のはじめ頃はまだ空き地が多く淋しい場所だったが、だんだん家が立ち並ぶようになると、どうも牢屋町ではまずいというので、新たに御幸町と称した。したがって、その名をとって御幸座といったわけである。ここまできて、わたしの頭にふっと一体町名が先だったのか、座名がさきだったのかという疑問が湧いた。そこで古老にたしかめてみたらやはり町名が先だったという。いずれにして

ても、町名座名ともにほとんど同じくらいの時に生れているのである。

座主は始め遠藤太郎、後に、安藤政吉で、柿葺落としは森田勘弥一座であった。当時、小田原の好劇家のほとんどが勘弥びいきで、すでに「喜の字会」もできていたので、その肝煎りで勘弥が迎えられたのである。勘弥のほかには市川介十郎、市川鬼丸(後の尾上多賀丞)、坂東三吉等があり、狂言は御目見得鞍馬山だんまり一番目一条大蔵卿、中幕三人片輪、二番目新皿屋敷で、非常な好評であった。こうして開場した御幸座は富貴座が映画常設館に転向した後の唯一の芝居小屋とし知られたが、大正十二年九月一日の関東大震災によって烏有に帰した。

そして間もなく再建されたが、それから三、四年の後ちょうど坂東彦蔵一座の興行中、楽屋から火をだしてまたもや焼失してしまった。そこで、早稲田劇場を買受け三度建設、その時から株式組織となり、昭和二年一月開場した。舞台間口九間、興行六間、廻し五間、花道は四尺四間であった。その第一回興行は市村市十郎一座で、狂言は弁天小僧、感勝五郎、曾我対面であった。

相当家が立て込んできたといふものの、元来が御幸町は裏通り、劇場の位置としては決して好条件の場所とはいえない難かった。それかあらぬか、その後二年ほどの間に相当の赤字が出たというので、株式は解散されて経営は曾我重五郎の手に移り、爾来、昭和三十六年十二月映画館に切りかわるまで劇場としてそんぞくしたのだった。

御幸座の興行誌を辿ってみると、大体が旅廻りの一座で、それもうら淋しい感じのするものが多かったが、それでもなお、東京の名優の興行も幾度か数えることができる。一体、小田原というところは桐座という由緒ある劇場があったためか、昔から好劇場が多く一流芝居は常に好成績を収めた。それでなければ観客層のガラリと変わった入場料十銭というような安興行で、

これはこれで大入であったが、どうも五十銭から一円五十銭ぐらいの中間のものはあまり受けないという風であった。これなどは小田原の一つの特色といふことが出来るかとも思うのである。

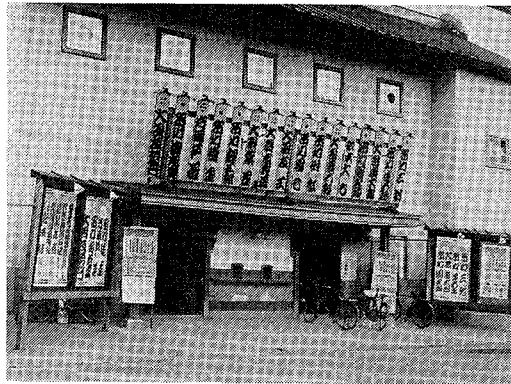
その主な興行は次のとおりである。  
大正十年夏、中村吉右衛門、坂東三津五郎一座  
藤太物語、平仮名盛衰記(逆櫓)、幡隨院長兵衛  
年月不祥、市川新之助一座  
高時その他  
年月不祥、尾上新七一座  
新七、華幸、しげる、琴次郎、芙蓉、竹之助、菊十郎  
真如、魚屋宗五郎  
その他  
年月不祥、市川新之助一座  
河原崎権十郎、坂東竹若  
二月堂良弁杉その他(以来、あまり大した興行なく)  
昭和十八年八月、沢村宗十郎 一座  
沢村宗十郎、市川三升、市川海老蔵、市川染五郎、片岡芦燕  
石切梶原、河内山宗俊、大森彦七、碁盤

これはこれで大入であったが、どうも五十銭から一円五十銭ぐらいの中間のものはあまり受けないという風であった。これなどは小田原の一つの特色といふことが出来るかとも思うのである。

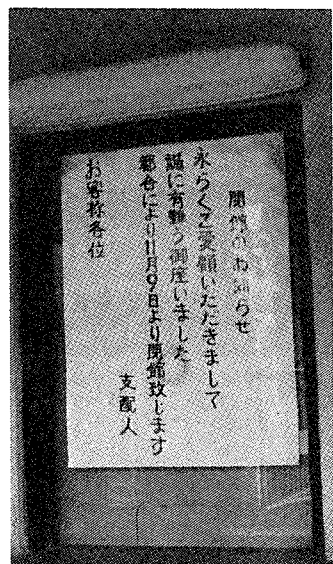
その主な興行は次のとおりである。  
大正十年夏、中村吉右衛門、坂東三津五郎一座  
藤太物語、平仮名盛衰記(逆櫓)、幡隨院長兵衛  
年月不祥、市川新之助一座  
高時その他  
年月不祥、尾上新七一座  
新七、華幸、しげる、琴次郎、芙蓉、竹之助、菊十郎  
真如、魚屋宗五郎  
その他  
年月不祥、市川新之助一座  
河原崎権十郎、坂東竹若  
二月堂良弁杉その他(以来、あまり大した興行なく)  
昭和十八年八月、沢村宗十郎 一座  
沢村宗十郎、市川三升、市川海老蔵、市川染五郎、片岡芦燕  
石切梶原、河内山宗俊、大森彦七、碁盤

これはこれで大入であったが、どうも五十銭から一円五十銭ぐらいの中間のものはあまり受けないという風であった。これなどは小田原の一つの特色といふことが出来るかとも思うのである。

その主な興行は次のとおりである。  
大正十年夏、中村吉右衛門、坂東三津五郎一座  
藤太物語、平仮名盛衰記(逆櫓)、幡隨院長兵衛  
年月不祥、市川新之助一座  
高時その他  
年月不祥、尾上新七一座  
新七、華幸、しげる、琴次郎、芙蓉、竹之助、菊十郎  
真如、魚屋宗五郎  
その他  
年月不祥、市川新之助一座  
河原崎権十郎、坂東竹若  
二月堂良弁杉その他(以来、あまり大した興行なく)  
昭和十八年八月、沢村宗十郎 一座  
沢村宗十郎、市川三升、市川海老蔵、市川染五郎、片岡芦燕  
石切梶原、河内山宗俊、大森彦七、碁盤



御幸座(昭和15年)  
小田原図書館所蔵



昭和59年11月9日閉館の御幸座

## Ⅱ千代台の産業Ⅱ

### 養蚕について

富田 千春

#### 一 千代台の概況

酒匂川を中央に扇状地形の足柄平野の中に永塚、千代、高田の三つの低台地が北西から南東方向に連なって突き出ている。その中でも千代台が一番高く標高約三十一mで、台地北縁には弥生後期の方形周溝墓、奈良時代の千代廃寺址、戦国、江戸時代の遺蹟も数多いけれど、今回は千代台の産業に絞って記して見たいと思う。

二 畑、水田で形成された産業  
大名、幕府が施政をとっていた封建体制下では、藩財政の根

源は年貢であり、特に水田稲作の石高は大きい存在であった。大久保忠世が初めて小田原の領主になり、その子忠隣と二代にわたり千代の蓮華寺を本部として、酒匂川の治水工事に取り組んだり、西大井村を起点として国府津村まで約一〇kmに及ぶ、酒匂川を引き入れての酒匂堰の開発大工事が施行された。又稲葉領主の寛文の頃、水田、千代千石にするために、南屋敷、北屋敷の村落をなしていたのを、千代台地に移住させて、上原、谷津上、の字にしたり等の色々の変遷はあったが、戦前の小田原地方の産業構成で典型的な農

村依存村の代表で、千代台地の畑作は特色があった。  
三 養蚕業の歴史  
養蚕の起源は太古代ともいわれ、始めは絹糸の生産は中国の独占で、絹織物の優美の魅力は外人の渴望で、遠く、シルクロードの名称も今に残っている。我が国では、太古神代から既に養蚕の事が現われており、皇室でも皇后親ら蚕を飼い、御奨励あった事は有名である。蚕糸業は種々の変遷があったが、近く大発展したのは徳川の末期、横浜開港以来で、生糸は国脈を繋ぐ主要な輸出品となった。

千代台地も明治の始め頃までは、粟、陸稲の普通作物を作ったり、自家用の棉を栽培していたが、明治の終わり大正になると畑に桑を植えて養蚕が大発達

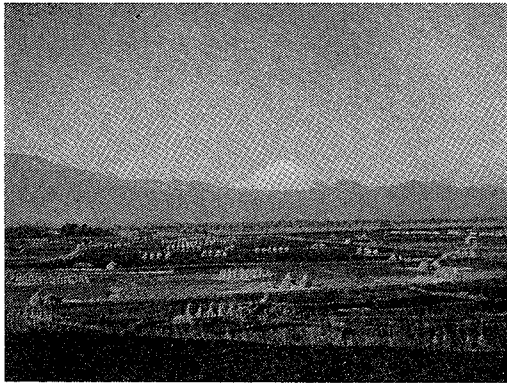
した。現金収入の少ない農家の現金収入は魅力の根源であり、私達が子供の頃の大正、昭和の始めにかけては、お蚕さまさまであった、大人は勿論、子供にとつても色々の思い出がある。  
四 飼育季節による種別  
季節によって分けると、四、五、六月の頃に飼育する春蚕、七月頃飼育する夏蚕、八月頃飼育するのを秋蚕、九、十月頃飼育するのを晩秋蚕というが、普

#### 三 養蚕業の歴史

昭和二十三年七月、森田勲助、水谷八重子一座  
。島千鳥、己が罪、鶴八次郎、昭和二十三年秋、坂東秀調、沢村源之助一座  
。野崎村、本朝二十四孝  
これ以後については、前進座なども来演しているが、記録がないので後日調査することとして、一応とどめておく。

寄席の始めについては明らかでないが、明治二十年代には、万年三丁目(高梨町)に万遊亭、幸一丁目(宮の前)に清々亭と

もしいばば行なわれた。この昇竜亭も大正大震災の時に焼失したが、間もなく幸一丁目の商工会議所の前に新築し、名も相竜館と改めたが、あまり永くは続かなかった。  
震災後、もう一つ幸町一丁目(新道)に清楽亭ができたが、これまたいくばくもなくして閉場した。  
このほかに幸一丁目松原神社西側、十字一丁目(筋偉橋)新玉一丁目(新宿)同三丁目(大工町)などにもあったといわれているが、これらについては明らかでない。



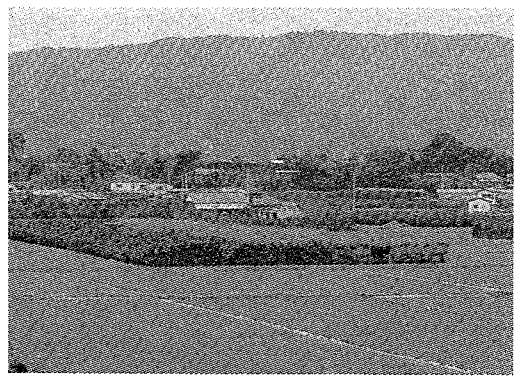
千代台より足柄平野を望む  
昭和七年十二月撮影(筆者)

今、群馬、埼玉、桐生等を旅行して車窓から見える桑畑は殆ど中刈仕立である。本県でも、津久井、高座の方の桑畑は中刈仕立が多いが、千代台地では全部根刈仕立であった。

春蚕の飼育も終わり、麦の取り入れ、水田の田植えもすんだ六月下旬に「まんがれい」といって村をあげて二三日の農上り休みがある。子供達は小遣いを貰い、新しい

六月上旬の上簇じょうぞくの頃は、田圃の麦も色づき、収穫、田植えと重なり農家では一番大変な農繁期であり、農村の小学校では大体一週間位の農繁休暇があった。子供達は家の仕事を手伝う。

五月 桑の仕立て方による種別  
蚕を飼うには桑を作らなければならぬ。桑の生産量でどの位の蚕が飼えるかがきまる。この為、畑という畑には殆ど桑を



千代台廃寺周辺

(2) 上郡には製糸工場が二〜三あったが、私の方には繭を造る産業だけであつた。でも沢山の繭を取扱うので商会という建物があった。学校には講堂もない時代、大きな建物で、床を一面に張った広い場所で繭を集めて商人が取引する建物である。繭等を扱う時以外は空

家で糸をとり自分で機を織る場合が多かった。農家にとってこれは地織りといって貴重な織物であつた。二月の春先頃、農家の主婦が農閑期を利用してこの農家でも良く機を織つた。梅の花が咲いて暖かい初春の日を一ぱい受けた農家から、トントんカラカラと機織る音がひびいてくる、本当に桃源郷を懐かす風物詩の一駒であつた。

着物を着、御馳走を作り、羽を伸して遊べる待ちに待つたうれしい年中行事だ。

(3) 蚕は一匹で一つの繭を造るのが普通であるが、一つの繭の中に二匹が入る同功繭、玉繭

七 これからの千代台地は米英との戦争が激しくなるにつれ、千代台の桑畑も、甘藷等の食糧作物に変わり、買出しの人で賑う様になった。

### 狂歌

天正十八年庚寅三月朔日、大相国秀吉公、小田原北条左京大夫氏直退治のため、駿河に長陣ありし時、裾野にて、「曾我兄弟が乗りし馬に、水より外飼ふ物なしといひける

も、今身の上に見えぬ」となげくをききて、由己、在陣を駿河の富士の山よりも高ねにかふは馬の豆かな  
〔醒睡笑〕  
由己は、大村由己。秀吉の御伽衆。高嶺と高嶺、飼うと買う、とをかけている。

# 足柄平野の セーノ神さんの思い出

栢山 曾我保夫

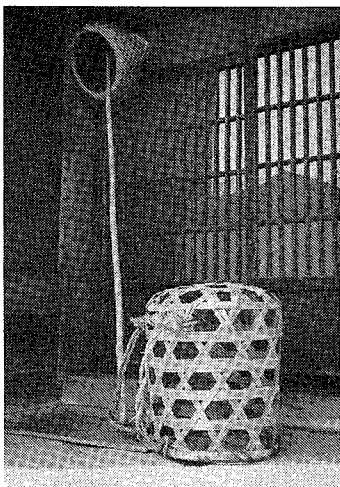
昔ながらの民俗行事が次々に消えていく中で、足柄平野の農村地帯での「セーノ神さん」は、太平洋戦争中から戦後にかけて、学校当局が、「好ましくない行事」として中止させたりしたため、急激に下火となった。

十四日の「セート払」のダンゴ焼行事を、私は、昭和四十五年頃から十二、三年かかって復活させた。都会の子供らには味わえぬ喜びだ。

セーノ神と言えば昔は、十二月八日の目一ツ小僧から始まるのである。

夜になると、どこの家でも、

みけーご(上)と背籠(下)



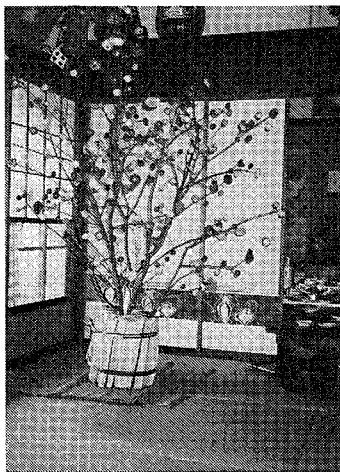
みけーごや背籠を玄関前においたり、みけーごを竹竿の頭にさしたりして高々と玄関前に立て掛ける行事がある。

それは、なんのためかという目一ツ小僧が帳面を持って各家々を廻り、この家では病気にする、この家では殺す、とか

帳面に書いて行くというので、目の沢山ある籠やみけーごを置いたり立てたりすると、目一ツ小僧は驚いて逃げて行ってしまふ、という昔から伝わって来た話によるものである。

正月三ヶ日過ぎると松飾り(門松)を取り除く。セーノ神

蘭玉



さんにもお寺と同じように(檀家)区域がある。四日になるとその区域内の門松や藁むしろ、などをもらい、セーノ神さんの所へ運び集める、その材料で掘っ立小屋を作って、その中で太鼓をたたいたり、モチを焼いて食べたりする。夜になると区域の各家に紙のお面「色々のお面」をかぶり、紙で作ったハタキを持って、悪魔払いに出掛け、家の内に入って悪魔払いの歌を歌い、ハタキをふる。外では太鼓をたたいて、なかなか盛大であった。これは十三日の夜まで続けた。

七日にはオンベ竿を立てる日で、真竹のある家へオンベ竹をもらいに行く、オンベ紙を集めに歩く(オンベ紙とおそねーの下敷きの紙のこと)。かぶ大根二本、扇子三本これで準備が出来た。

十四日には、掘っ立小屋と、

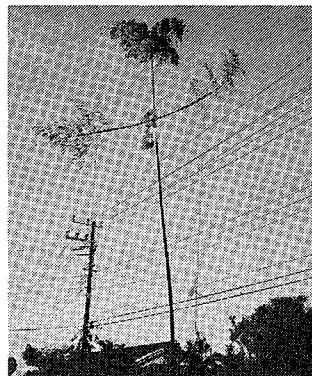
セーノ神さんにお納められた物は、残らず焼いてしまおうのをセート払いという。

残らず焼くのは、十二月八日の夜、目一ツ小僧が各家を廻った時の帳面をセーノ神さんに預けて置いたが、一月十四日の夜にセーノ神さんの家が丸焼になってしまったので、帳面のことは、全部ゴハサンになった、という昔話があるためだそうである。各家では、朝から豊作を祈り願うため蘭玉作りで忙しい。午後三時

ころから色とりどりのダンゴを竹の棒が曲がるほど沢山さす。そして、子供達が集まってダンゴ焼きが始まる。セート払いで焼いたダンゴを食うと、風邪をひかないという。又書初めを燃やした時高く燃え上がると習字が上手になると言ふことで、高く上がるたびに喊声

ト払いとかドンド焼きという。大人は餓鬼大将の家から酒と肴が出る、そこで酒盛りが始まる。十五日の朝早く、セート払いの残火を「ジュウノ」で家に持って来て、それを火種にして小豆粥を作って無病息災を祈っ

おんべ竿



だんご焼

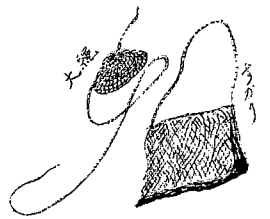


た。蘭玉は、十六日の風にあてないように十五日の内に抱き取れと、昔の人は言う。松飾り、注連縄を焼いて正月の神様を送りその年の福を祈るのは、全国共通の「左義長」の行事である。

(了)

## 打ち縄釣り・角鈎考(二)

文と絵 隠岐 威重



前号で、打縄釣を楽しむ面々を紹介したが、この打縄釣りは赤星グループの専売ではない。

この西湘地方に古くから伝わっている漁法なのだ。東は大磯辺から西は小田原早川まで、砂浜が続く西湘地方独特の釣りだ。海が急に深く、沖を回遊する魚が、浜付きの鮫類が深くえぐれた浜岸にせまるためにこの漁法

が生まれたのだ。いつの時代に始まったかは知らぬが、老人がまだ子供、幼児の頃、小田原藩の土族出の老人たちが、尻をジンジンばしよりにして縄を上品に打っていた姿をおぼえている。小田原藩時代の土族の遊びだったかも知れぬ。

東北は庄内藩、その日本海側で、同藩の武技の一つに黒鯛釣りを藩技としてとりあげていた。晩秋から初冬の日本海、白波が磯をかむ寒い海に、素足にわらじがけの黒鯛釣りは、泰平の時代に戦場を忘れぬ勇壮な武技として、藩主自ら先頭に立ってい

が独特な剛直な庄内竿として現在にも残り伝わっている。

この地の大縄釣りなども明るい太平洋側のより剛快な釣法だ。武芸の鍛練の一端を荷なうことも出来ただろうが、根がおとなしい小田原気質、魚釣りなどつまらぬ遊芸だと、藩技としてはお取り上げにならなかったよう

だ。以上、打縄釣りの背景を書いたが、次にはこの漁具漁法を語ろう。

## 一 ある年の夏

その年は、天候異変で寒かったほうがよい夏だった。七月末から八月初めにかけてこの

しまつだった。先が思いやられる。だが海釣りの本格化、九月十月までには間があるが。アユの友釣りでもときたいしい

が、それも、晩秋のアユの瀬付時(産卵期)の大雨で親アユがほとんど海に流され死滅してしまつた。

いやな予感がしていたが、それが的中して、春三、四月にな

ると遡上前に四・五cmに育ち、港の灯台下に群れて、アミエサで面白いように釣れる小アユが毎年の風物詩なのだが、今春はそれもなかった。

六月に川が開けた。そぎ取つたような石垢のハミ跡もない。わずかばかりの放流魚では自然の遡上ものの穴はうめられぬ。一日サオをもち、糸をたれてみたが、極たまにしかオト追わず、あとがつかない。

例年なら浅瀬を歩くと小アユが逃げまどうのだが今年はその姿もない。水量は平年より多く、河相もよいのだが、魚の住まぬ川は不気味だ。

## 二 打ちナワ釣り

ひまつぶしに釣り道具屋を訪ねた。つり人社から出たもので西山徹氏著『海のルアーフィッシング』という本が目に入った。求めて読んでみた。著者はお若い

が、なかなか博識で教えられることが多く面白く読めた。その中に和風ルアー(角バリ)

湘南海岸の打ナワ釣りについて、軽くふれているのに興味がわいた。

今から二十数年も前、昭和二十八、九年頃、『つり人』誌上に相模湾の打ちナワ釣り、及び角バリについてという拙稿を投じたことを思いだしたからだ。

西山氏のご指摘のごとく、確かに打ちナワ釣りは当地方から姿をけし、また角バリ作りもほとんどいなくなつてしまった。西湘地区では、小田原山王の浅見謙次老の死後は後継者がいない。淋しいことだ。

四間あまりの物干しザオのような一本ものの竹ザオで長さ十数尋(二十五m)、重さ百余匁(四百g)の麻製の大ナワ。先の頭の太さは中指大から次第に細くヨリ下し、下端は二mmぐらいになる。その麻製の縄を柿澁にしめし、弾力と腰のねばりをつる。そのナワの先に三本よりのテグスをまた二、三尋付け、その先に角バリを装着する。

この大道具を四間余りの竹ザオで、カウボーイの鞭よろしく振り回すのは大仕事で現代的でない。

だが、紺の半天を着て、下はキリッとしたパッチをはき、柿澁をかかしたスカリ(魚入れ、道具入れ)を肩に掛け、日焼けした麦わら帽子といういでたちで四間ザオをかっつき、魚群は出

ないか、スズキのハネはないかと波打ちぎわに仁王立ちする釣人はりりしいものだ。

この漁法は、スピニングリールの投げザオで代行されるようになった。投げザオのほうがハリを遠くに投げるに便利だ。ただ著者には何かものたりぬ。味がないのだ。波間に群れる魚群の行先的確に角バリを送りこむ、また河口で大雨のあと、流れ出した川魚をスズキが追うとき、ポイントにズバリ、ハリを打ち込むには、投げザオより数段すぐれた血の通った漁法だ。

打ち込んだナワがぐつと重くなる。釣りはサオを立てる。耐えかねたスズキが頭を出す。口にくわえた角バリの赤白の羽根が、魚の大口のアゴの飾物のようによく見える。

目をむき、大きな口をひらき、エラ洗いをしながら釣りをにらむ。一躍、二躍。その重責感、ナワを通じビシビシと響く。だが大ナワはピンと一直線には張らぬ。自重でゆつたりとたるんでいる。ゆるんでいるように見えるが、ナワは緊張しているのだ。曲線を描いて緊張している

のだ。大魚の必死の抵抗は、ナワの横振れになって釣り人に通じる。

スズキの遁走が始まる。必死で、汗だくで耐えていた釣り人は四間余の物干しザオを肩にか





つぎ、後向きに浜を駆けあがるのだ。

スズキはずるい奴なのだ。ハリからのがれようと波打ちぎわに向かい必死で走り、ナワをゆるめるすきをうかがう。そうはさせじと、釣り人は浜をいきせき切ってかけ上がる。かけ上がるのだ。

今度は波打ちぎわで魚は横を向き化石と化して動かない。大波が打ちよせる。魚は波のふところをぬけ、沖に向って新たな遁走にうつる……

釣り人の顔に油脂がにじむ、心臓はまさに破裂しそうに早鐘を打つ、打つ……

もういい、こんな釣りはなくなってしまうのだ。過去の遺物と消えてしまったのだ。

老人の頭の中に、手の平に、身体の中に、昔々の感覚として残っているだけだ。

### 三角バリ礼賛

浜でワカシやソウダの魚群を追いかけている老人の群れの中に、超高級のカーボン製の投げザオ、超高級のスピンングリール、ハリは新出来だが中々立派な牛角バリで、ピカピカの装備をした若者が必ず一人や二人はいる。そんな若者はジープを無造作にたくしあげ、海水でズボンがぬれるのもかまわず、物憂げなくさで釣りをしている。だが、超一級品で装備している彼らは、超一流品を持った楽しみと、釣果をあまり期待しない楽しみをあじわっている心豊

かな若者達なのである。

その一流品の中に角バリが入っている。一本三百円のビニール製のハリでなく、一本千円それ以上の本角バリである。ああ、角バリはまだ生きて……と、つくづく感じる。

最近ではビニール製で、姿は昔のまゝのものや、小ダコを形どり、頭に鉛を入れるトロウリング用のギジバリがある。トロウリングで角バリとビニールバリを釣り比べてみたが、ソウダやシイラでは甲乙つけがたい。

だが一つ位の上のイナダ、スズキ、ヒラメ級になると角バリに軍配があがる。

理由は分からぬ。イナダ以上の魚は必ずしも光だけのハリを好まぬようだ。ビニール製は光りものとしては、なかなかよくできているが、その他の面では今一歩というところだ。

角バリの内容を分類してみると、光りものは、ただその中の一項目でしかなく、別の要素がまだ沢山ある。

当地ではこの光りものを光りッパ(光りバナ)という。

牛角・爪、馬爪の膠質のものからは、なかなかビニールのようには出ない。牛角の透明に近い白、青系のものに、わずかに光るものが得られるだけだ。一層光るものを望む漁師が、アワビの貝殻でハリを作っ

たのもみた。

こんな光りものをソウダやワカシは好む、幼児が鉛を好むように。だが、ワカシがイナダに出世すると、もう一筋ナワでいかぬ。光るものだけでは駄目なのだ。カンパチ、メジ、スズキ、ヒラメになると、もっと他の要素を持つ少し地味な落ちついた種類の角バリを好む。その摂取するエサの種類、住む環境に左右されるようだ。

さて、角バリについて少しくわしく述べよう。

いつかテレビを見ていたら、弥生時代の生活を再現している画面があった。その中に骨バリを作って魚を釣ってみせる場面を面白く見た。

何の骨で作ったかは分からぬが、当時代はまだ牛馬は渡来してはいなかったから、鹿か野猪の骨、角で作ったものではなからうか。胴太の世にも不恰好なハリ。エサは付けていたかどうかは詳らかでなかった。これは重要なことなのだが、私にはエサが付いていなかったように見えた。

ハリを海底におろすとメバルが、その胴太のハリをほうばるようにして釣りあがってきた。魚はその骨バリを食物とみて、むさぼるように食いついてきた。ご馳走の大きな塊に見えたに違

いない。

その時、私はひらめいた。金属バリは魚の口に引っ掛かる機能、構造だけなのだが、骨バリはハリの機能と同時に、魚には食物に見えるのだ。これはギジバリの元祖ではないかと。

古代人の経験、知恵に舌をまいた。いささか推理の行きすぎかも知れぬが、だがね角バリはそんな性質を全部そなえているように見えた。

先にすすもう。まず素材から。素材には、牛角・爪・馬爪・山羊の角・鹿の角、変わったところではアワビの貝殻、堅木などがある。

ハリは鉄バリの末部が尖り、抜止めのないものを角に焼きばめる。それに水鳥の羽根赤白でハリ部を飾る。

角本体はく字に焼き曲げ、水中で引くと回転する構造に仕上げられる。

角バリ材の主流は牛馬が一般的だ。とくに牛が多い。それは材料の入手が容易なためだ。食用用に屠殺した牛馬の角爪を生のもので最上だ。死

角はだめなのだ。角が水中で変化しないからだ。角バリ屋に行くとき裏庭に生の角爪が野積みになっていて腐臭がただよっていたものだ。知人が自家用(飲用に山羊を飼っていた。その男が角バリマニヤ

で、自分の山羊の角に血豆があるのに気がついて、(山羊が喧嘩でもしてできたのだろう)嫌がる山羊をしぼり上げ、鋸で血入りの角を切断し、角バリにしあげた猛者がいた。血入りの山羊の角バリは珍品の一つなのだ。

四 ハリの色もよう

色は茶、黒、白、およびその混色が多い。

①白系 まっ白いもの、俗称白子と、透明な白、青みがあった透明な透明な白(青サ)がある。光りものはこの系統の中に多い。

透明、不透明な白が二層、三層に積み重なったものを白の一枚三枚という。また古角で白が変色し黄ばんだ物を小便キバミといい、中にはバカ食する角があり珍重したものだ。白系は一般向きで上層魚のソウダ・イナダ・

シイラに向く。

②黒系 馬爪が主体、真黒なものから、小豆いろしたものの(羊かんという)までをいう。一見すると黒く見えるが、しばらく水に浸すと、心に赤味がさし、もしそれに胡麻もようでも入れば超一級品だ。スズキ向き。

③赤系 赤といっても柿色または黒みがかった重い朱色。また反対に軽い桜色をしたものがある。この色にも透明、不透明色があり、馬爪、牛角爪に多い。俗称アカザキ。イナダ・カンパチ・ヒラアジに向く。

④混色 角爪には単色のものより混色の方が多い。背が黒または赤で腹が白いもの、赤背(黒背)の白腹と呼ぶ。また牛角には黒・茶・白の混色で美しい模様を描くものが多い。鹿爪は腹が透明な青みがかった白で、背は茶をひとはけぬった小角が

多い。爪自体、中々入手困難なうえ、肉部が薄いので取り扱い要注意。珍品の部に入る。また鹿角はイカ角専用だが、最近はおとんどお目にかからぬ。

⑤模様を中心に。牛角には美しい模様を持ったものが多い。牛爪は二ヶ所からハリを作る。爪の前部と、爪をつなぐ腕部の二ヶ所からだ。爪の前部から通称タカツバという鷹の羽模様が背に浮きだし、腹は楯目を通り、側面は背模様の断面が正確に出ているものは最高級品といえる。万金を投じてでも惜しくない。主にスズキ向き。ハゼ・カジカに似ている。

大札幌市の基礎を築いた。のち明治維新の変革に遭い帰国、郷土の振興に貢献した。(高田喜久三)

爪の腕部から出るものは、枝取りが困難で材質が柔らかいのが弱点だが、逆に早く水になじむ利点もある。ドフ牛の胡麻入り呼ばれる赤味がかった背が薄く白くぬめり、心部に胡麻が入

たものは魚殺しの一級品だ。山羊角は透明な白が多い。前記の血入りの羊角など珍品のうち。ただし小角しかとれぬ。イナダソウダに向く。

⑥野腐 農耕牛馬が爪の手入れが悪く、水虫にでもかかったのだらう? 生爪のうちから爪が少々腐っていて、出来上がったハリにも水虫の跡や虫食いの穴があるものがある。だが、この種のものにバカ食いするものがある。ノグサレと呼び珍品の一つ。

五 釣り人と角  
以上述べたように、馬・牛・鹿・山羊の角爪から作るハリだから厳密にいうと一つとして同じ角爪から作っても同一品は得られない。同じ角爪の材料の隣合わせのものを兄弟角といい、大体似た模様、体質のものが出来るが、これとても厳密にいえば同一のものでない。

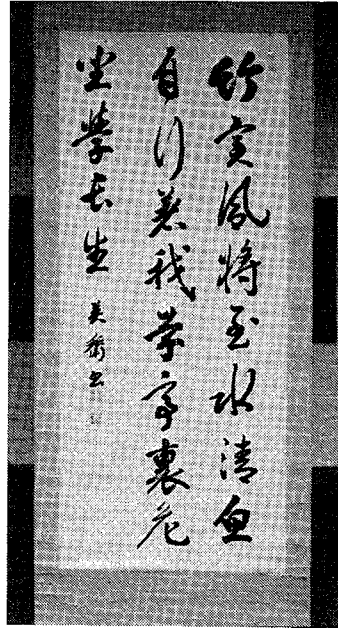
「あつた、あつた」素頓狂な声があがる。漁師は角ハリをいただき、天にかざし、それを又口に入れ唾液でぬらして角の健全を確かめている。今度は小声で「あつた、あつた」と涙と喜びで顔をくしゃくしゃにしている。

「あつた、あつた」素頓狂な声があがる。漁師は角ハリをいただき、天にかざし、それを又口に入れ唾液でぬらして角の健全を確かめている。今度は小声で「あつた、あつた」と涙と喜びで顔をくしゃくしゃにしている。

六 戦前の話  
夏の終わりに、西湘の浜は土用の大波が洗っている。雨足が早

多。爪自体、中々入手困難なうえ、肉部が薄いので取り扱い要注意。珍品の部に入る。また鹿角はイカ角専用だが、最近はおとんどお目にかからぬ。

⑤模様を中心に。牛角には美しい模様を持ったものが多い。牛爪は二ヶ所からハリを作る。爪の前部と、爪をつなぐ腕部の二ヶ所からだ。爪の前部から通称タカツバという鷹の羽模様が背に浮きだし、腹は楯目を通り、側面は背模様の断面が正確に出ているものは最高級品といえる。万金を投じてでも惜しくない。主にスズキ向き。ハゼ・カジカに似ている。



「あつた、あつた」素頓狂な声があがる。漁師は角ハリをいただき、天にかざし、それを又口に入れ唾液でぬらして角の健全を確かめている。今度は小声で「あつた、あつた」と涙と喜びで顔をくしゃくしゃにしている。

六 戦前の話  
夏の終わりに、西湘の浜は土用の大波が洗っている。雨足が早





い。沖をシケが通っている。とうてい釣りにならぬ天候だ。番傘をさし、バスに乗り次ぎ、山王の集落まで角バリを求めに行く。雨の日の角バリ求めも釣りに劣らぬ楽しみの一つだ。今度はこのハリで、この仕掛けでと空想が馳せめぐる。

土間をはさんで作業場と居間に分かれた百姓家作りの浅見老宅に着く。看板も何も出してない構えがいい。

謙次老は作業場で老眼鏡をかけ角削りに余念がない。居間ではかみさんが打縄用の麻の束をポコポコと檜の台木に槌を打ちつけ柔らげている。

青臭い学生が入ってきて、老人は老眼鏡の上から、上目づかいに一瞥しただけで、作業の手を休めない。若者も無言で上がり込み、半できの角をあさり出す。「……………いい角があるよ、

待ていな」しばらくたって、老の聲がかかる。

作業が一段落としたところで、老人は前掛けの上の角の削りかすをほらい、すわりづかれで曲がった腰を伸ばし立ち上がり奥の座敷に行く。赤っちゃんけた鉄の飾りの付いた古風なタンスの引出から一握りの角バリを取り出して客の前に並べる。

これが老のやり口なのだ。商売の掛け引きなのだ。わざわざ奥のタンスからとりだすところが……………

「この三枚の白っ腹を見なせい。ふるい付きたくなるいい白だ。背、腹どこをとっても一番だ。こねえだこの兄弟角で酒匂で一貫メのスズキをあげた。まぢげえねえ、その兄弟がこの二本だ。まぢげえねえ」

老はその角を口に入れ、唾液をたっぷりつけて客の鼻先につ

き出す。

そうだ。筆者は一人よがりしている。なぜ角バリを口に含み、ツバキつけるかを少しも説明していない。

前にも述べたが、角バリは水に浸してこそ本当の姿が現われるのだ、分かるのだ。

角・爪が水分に浸り膠質部がぬめり、心部の奥の模様がかつきりと浮き出す。

真黒い馬爪がハニカング小娘のような紅色に変わった。白の三枚の背がトロケタ牛乳に化し腹が怪しく輝くものだ。老の店には水を入れた洗面器が置いてある。だが、なれた打ちナワ

漁師はそんなものに目もくれぬ。戦場(釣り場)では角ハリは海に投げ込むまで、釣り人の口中か、しめつた砂の中に入ら

れ、湿気を与えておくものだ。釣り場には金盥はない。魚群が姿を消すと、釣り人は浜に車座に座る。羅漢さまの休息だ。五百羅漢の中からぬけ出た羅漢様丸い顔、長い顔、ずるそうな顔、皆日焼けして。休憩もまた楽しみの一つだ。各自が角袋を開けて、得意の角を披露しあう。

「何だ、こんな腐った角、捨てちまえ」

「ばか何ういうねこの背、この腹、見てみろ、よかんべえ、隣の後家のように魚がふるいつかあ……………」

自慢の角は羅漢どもの口から口へ、唾液とともにまわされる。ためつすがめつ、ほめたりけなしあったりして……………

終章 果てぬ回想

著者はそれを浅見老から受け取り、また自分の口にボンとはおりこみ、充分唾液を付け、角をしめらせ、ためつすがめつ眺め入る。これがこの場の礼儀なのだ。老人のわずかに残った黄色い歯がある薄汚い口に入り、泡立ったツバキが付いた角をまた自分の口に入れるのは、正直いって最初は非常に抵抗を感じた。

だが、この儀式をやらぬとい角を分けてもらえない。いや三回に二回は駄物をつかまされるのだが、一回の掘り出し物のために、この儀式は欠かせないのだ。

値で大磯の旦那の手に落ちたり、生意気な書生ぼのどぼしい小ずかいを空にしたりする。ある時、どこかで、こんな話をきいた。

朝のおそめの通勤列車の二等車(今のグリーン車)に、大磯から人品いやしからぬ紳士が乗り込んで来た。

紳士は新聞を読みあきると、やおら内懐から怪しげな小物を取り出し、口に含み、薄笑いしながら、その小物をためつすがめつ眺め入り、悦に入っていたようだ。

「気色が悪いよ、大の大人が変なものを舐めたり、さすったりして、ニヤニヤ笑って、気が変なのと違うか……………」と。

書生はその話を聞いて、思わず笑い出してしまった。そうだ大磯の旦那だ。謙次老宅でのツバ兄弟のあの磯の大磯の旦那だ。

〔注大磯のその旦那は赤星さんの友人の樺山伯の息子さんだと記憶している〕



紀伊神社の御輿 (延享4年)

私の早川村誌(八)

紀伊神社のこと

青木友吉

早川の紀伊神社について

『新編相模風土記稿』には、

「本地地藏ヲ置村ノ鎮守ナリ

……」

『皇國地誌残稿』には、

「五十猛命ヲ祀り古ハ木之宮

大権現後紀伊之宮大権現ト称

へ本地仏地藏ヲ置、干明治維新

後現称ニ改ム……」とあり、

往時神仏混淆のあとを伝えてい

る。

境内には鐘楼があり、かつて

は貞享元年(一六八〇) 铸造の鐘が

懸けられ、更に天保十一年(一八

四〇)に再建された鐘が太平洋戦

争の供出のため、長い間鐘楼の

みが存在した。昭和二十九年

(一五七) 四月二十四日、香取正

彦によって再鑄奉納された。神

社と梵鐘とは珍しく仏教の影を

深く残している。かつて本地仏

の金色の石地藏尊は神社と別の

地藏堂の中に安置されている。

紀伊神社の元の所在地は、現

神社の階を下ったJR東海道線

の地であった。社が大正六年当

時国鉄熱海線建設の路線にかか

つたための現在地への移転であ

った。工事のため掘り返された

壺が発掘された。古常滑の三筋

壺、常滑の壺、青白磁、何故か

不明だが意図的に全部の壺の口

辺が缺かれている。村人は発見

するとすぐ水洗いしてしまった。

壺の中身は全く不明である。経

文か、分骨か、知る由もない。

立木望隆氏は修験道に關係があ

るのでとは疑問を投げられてい

る。

境内の収納庫には、二基の輿

が納められている。昭和三年四

月二十四日御大典記念に奉納さ

れたものと、延享四年天領より

小田原藩に復帰した年に造られ

たものである。

昭和参年四月二十四日の輿の

台の裏側には

神職 露木才助

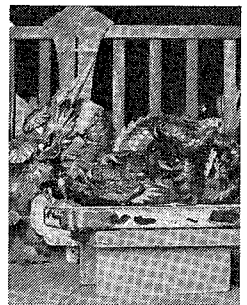
氏子 加藤愛之助

小倉松五郎

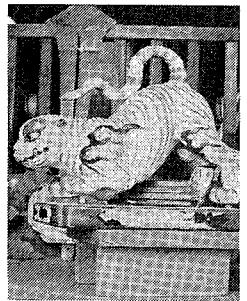
外九名の氏子の氏名があり、

大工 棟梁 野谷長吉

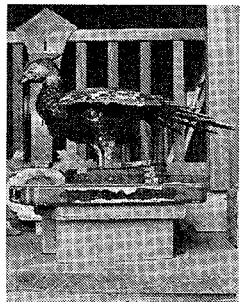
彫刻 大隅源次郎、と彫られている。延享四年(一七九二) 六月二十二日の輿の台の裏側には、次の人々が墨書されている。



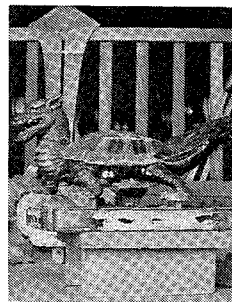
青龍(東)



白虎(西)



朱雀(南)



玄武(北)

世話人

加藤繁八

大津武左衛門

青木伝八

露木右衛門

露木治右衛門

鈴木重兵衛

大工 五郎左衛門

高梨町 高梨町

渥師 蓮池左内

ちなみに加藤繁八の後裔は加

藤愛之助である。

小田原の輿で延享の物は古い

ものと思われるが、普通見かけ

る型式は寄せ棟造りであるのに

八棟造りは極めて珍しい構造で

はないかと思われる。精緻華麗

なもので、余り大きなものでは

ないが製作者の技術がうかがえ

る程のものである。小田原高梨

町の佛師、蓮池左内が渥師(塗

師)として関係しているが、彫

刻も考えられる。

紀伊神社の祭礼で、特筆出来

ることは、五個縦に並ぶ左三ツ

巴紋の旗二流、大太鼓、賽銭箱

、天狗面一人、銅鈴、青龍

、

、

、

、

、

、

、

# 助郷の成立をめぐる

宇佐美ミサ子

定

助郷とは江戸幕府が街道の宿

駅周辺の農民に課した夫役のことである。江戸幕府は、交通制度として慶長六年(一六〇一)宿駅

制度を定め、人馬を常置し継立を行なったが、常置人馬では不足となったため、街道の近在農村から人馬を徴発し補填した。その補填人馬のことを助郷とい

い、人馬を提供する村を助郷村と言った。助郷には、常時人馬を提供する定助郷と大通行の場合などに臨時に補給する大助郷などがあり、幕府が直接指定した。助郷は農民にとって最大の負担であり、近世を通して農村

疲弊の主要因ともなった。助郷制度の成立は、一般的に元禄七年(一六九二)と言われている。助郷の成立については諸説があり、元禄七年説、寛永十二年説、元和二年説等々。いまだ

する。

一、御伝馬并駄賃荷つくる事、宿中馬持次第可付之事

一、駄賃馬多く入候時ハ、其町

より在々之馬をも雇ひ、荷物

遅々無之様ニ風雨をもさらは

す可出之事(以下略)・点筆者

この「御伝馬」「駄賃馬」と

いうのは、宿の常置人馬を意味

し「在々之馬」というのは、近

在農村の馬のことで、これは公

用人馬として解釈できるという

ことである。すなわち、「公儀

役」としての人馬徴発を意味す

るもので「助郷」として機能し

ているという解釈である。詳細

は別の機会に譲ることとして、

次に寛永十四年説は、同年三月

十六日に下知された「助馬令」

に論拠を求めている。左に必要な

部分を記す。

道中助馬之儀ニ付賞之事

一、今度助馬ニ付候郷村ハ、町

ナミ・同前ニ高役をゆるし可申

候、(以下略)

一、今度助馬ニ付郷村ハ、往還

之衆多く通申候時ハ、其町ニ

馬不足荷物つかへ候時、助馬

二可出候 (以下略)

すなわち、右の二項目の・点

の部分であるが、「其町ノ馬」

というのは、宿の常備人馬のこ

とで、常備人馬の不足の折は、

近在諸村に「助馬」を提供させ

るというもので、「高役」負担

となつていことがわかる。つ

まり「助馬高」が付せられてい

るとみなすことが出来、助馬村

が幕府によって指定されていた

と指摘できるのである。

このように元和二年説、寛永

十四年説、いずれも「在々之馬」

「助馬」の提供により、助郷と

して機能しているという点で、

助郷の成立をこの時期に求めこ

とを根拠としている。

ところで、助郷の成立に関し

て地域で考えてみたいと思う。

小田原宿の例をみることにした

い。

管見によれば、小田原宿関係

で「助馬」ということが散見

できる史料は、貞享三年(一六八

『御引渡記録集成』である。こ

れによると、

小田原宿伝馬百疋の外、在々

助馬五十疋遣し候村

とあり、左の村々が記載され

ている。

川輪村・羽根尾村・國府津村・

高田村・前川村・小八幡村・

下堀村・中里村・別堀村・今

井村・町田村・中島村・板橋

村・風祭村・入生田村・湯本

村 以上である。

見ての通り、これらの村は、

街道沿いの村々で、小田原宿ま

での距離も近く、宿の常備人馬

が不足となった時は、触書があ

れば容易に提供できるという条

件にある。五十疋の「助馬」の

配分については不明であるが、

宿の常備人馬不足の折の補填と

して出役していることは事実で

ある。

寛永十二年(一六三三)参勤交代

制実施から急激に交通量は増加

し、宿の常置人馬では継立に間

にあわず、近在農村の在郷馬の

助成を仰がねばならなくなつて

いた。

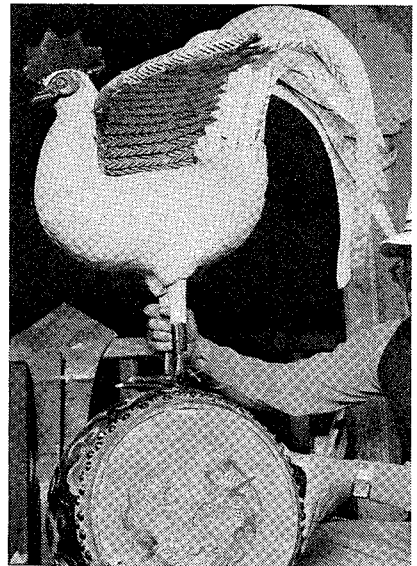
つまり、元禄七年の助郷制度

成立以前に、助馬制の下で、助

郷の役割を果たしていたことに

なる。そして、これらの「助馬」

の村々が、指定助郷へと転化し、



紀伊神社 漢鼓

元禄七年に至って、制度として確立したと考えるのが妥当であるように思われる。街道によっては転化の時期は若干遅速の差があるが、「助馬」を事実上の助郷の存在と認めることができるのである。

以上、紙幅の関係で、ごく大雑把に助郷の成立をめぐる若干の問題を記したが、小田原宿の場合について詳細に検討したいと思う。後日の研究に委ねることになしたい。

(うさみ みさこ 小田原地  
方史研究会代表)



# 幕末、中島・本久寺に住持された成貞尼について(二)

小野意雄

## 内容

- 一、とはずかたらず
  - 1 「桜狩り」の詠歌
  - 2 父武者小路実純卿
  - 3 京洛での成貞(以上二三五号所載)
  - 二、女人結縁
  - 1 「雲上夢通路」剣持広吉
  - 2 清水谷実摺卿
  - 3 「御点」有浦章、「文」吉岡信之(以上本号所載)
  - 三、本久寺の再建
  - 1 日頃の帰山と紀軽人
  - 2 貞庵の構図
  - 3 再建工事
  - 四、シーボルト事件
  - 1 旅立ち
  - 2 シーボルト事件に巻込まれて
  - 3 小倉家と成貞
- 別稿「成貞法尼出自考」

## 二 女人結縁

### 1 「雲上夢通路」……剣持広吉

『小田原の金石文』の中野報告を参考にしながら、高田稔氏は、「相州曾比村仕法頼末——剣持広吉とその周辺」(『尊徳開顕』所収。昭和六十二年九月刊)で、剣持広吉と成貞との関係について、つぎのように述べておられます。

「広吉の和歌の師はだれであったか。中野敬次郎氏によれば京都の堂上歌人・清水谷公正(キンナオ)とされている。しかし、剣持家にこの書簡、短冊等からは、むしろ公正の父実摺(サネオサ)やさらに四代前の実業(サネナリ)、高松宰相との歌道のつながりが予想される。いずれにしても、この堂上方への接近は成貞尼と称する女人の媒介によるものであったことが、遺された書

簡から明らかである。

小田原市山王の本久寺に接する稲荷社境内に『成貞法尼詠歌碑』がある。この碑文によると成貞尼は京都の生まれで、小田原にきて二十余年住み、国文和歌にいそしむとある。

この碑は、尼と和歌仲間であった小田原の豪商小西直哉、辻村陳質、野沢直道と剣持経広(広吉)が文久元年(一八六二)に建てたものである。成貞尼については、これ以上その前歴を知る資料はない。

つづけて高田氏は、広吉(寛政十年〜明治三年 一七六九〜一八三九)のご子孫剣持孝文氏所蔵資料によって、

「嘉永三(一八五〇)年、五十三歳になった広吉は、『雲上夢通路』と題して、東海道五十三次の絵に和歌を添えて京都の清水谷家の当主公正に贈った。……絵は岡本秋暉の作と伝えられている。秋暉は小田原藩士、絵を大西圭齊に学び花鳥画を得意とした。また広吉の依頼によって二宮尊徳をスケッチし、画像に仕上げたことでも知られている。……」

『雲上夢通路』は旅中の風懐を詠んだものではない。序に「……いまだ王城の地をふまざりしハ、いかでかななしきことなむおもほへぬれども、ただ産業にいとまあらねば本意なくけふにこそうち過ぬれ……我がやどにふしめかづきてだに都をしたい奉り心ばかりもかよはせばやと……筆をとるのみなりき」とあるとおり、村政のきりもりに忙しいなかで、王城へのたちがたい憧



雲上夢通路 京都

れから生まれた敬神尊皇の詠歌がめだつ。

日本橋！ひさかたの てるひのもの はしとらば  
かけてとたのむ かみのちかひを

と、記述されています。なお、『小田原の近世文書目録2』(小田原市立図書館刊)によると、剣持家には、

- 2 『(小田原市立図書館刊)によると、剣持家には、
- 書状 弘化四年 (差出人) 剣持広吉 (請取人) 成貞 一通
- 詠草 他歌集 六冊
- 東海道五十三次詠草 三冊
- 詠草 (広吉の絵並筆) (六三綴) 三冊
- 十一綴 十七綴) 七十状
- 短冊

これら剣持家文書を見ますと、詠草や書状には、広吉の自筆とともに、成貞の筆と思われるものもみられます。広吉は成貞から、清水谷実業等の詠草その他を教本として与えられて、書や和歌を学び、京都への思いを強めていったのではないのでしょうか。広吉が岡本秋暉に依頼して、二宮尊徳を描いてもらったのは、天保十二(一八四一)年のことです。こうした秋暉との交遊の中から和歌への関心を深め、進んで成貞について学びはじめたのは、弘化二(一八四一)年正月頃からと思われる。京都との繋がり、弘化四(一八四三)年頃からでしょう。約二年間の研鑽で、急速な上達ぶりを示しています。

岡本秋暉は、江戸城において三條実美(サネミ、天保八年〜明治二十四年 一八三七〜一八六九)の知遇を受けますが、『雲上夢通路』の結ぶ知縁に関係あつたことでしょうか。中野氏は「小田原の文化を築いた人びと(近世以後の芸能文化の歴史)」で、つぎのように述べています。

「かつて、三條実美が勅使として江戸に下ったときに、幕府絵師の狩野家と秋暉とが選ばれて御前揮毫をしたところが、実美が非常に秋暉の画を愛賞して、それ以後は所望によって毎年のように京都に画を贈ることになっていたので、秋暉自身も数回上京して、彼の地の公卿衆や勤皇の志士たちと交わりを重ねるようになっていつしか志尊皇に傾くに至ったのであるという。それ故、隆徳が

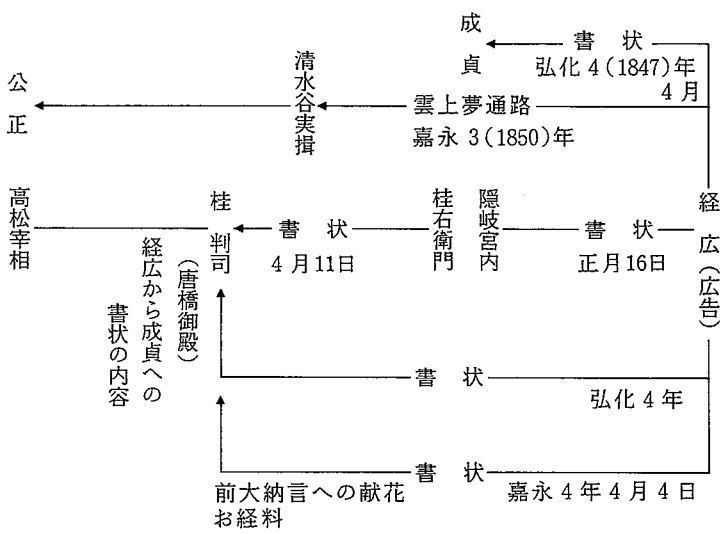
京都に出て志士と相交わるに至ったのは十九歳のときであったが、それは全く父の意志で、父の知人をたよって往ったのであった。」

2 清水谷実揖卿

清水谷家の家職は「書道」ですが、実揖の四代前の実業は有名な歌人です。「実業卿百首」、「口伝」、「御答」、「紀行」などを残し、また「武者小路実陰詠草」、「中院通茂詠草」と合一冊をなす「清水谷実業詠草」を残しております。

剣持広吉の場合、清水谷家へのアクセスは、左の図のようになっています。

実揖は、天保十三(一八四二)年(六十一歳)に権大納言を辞して隠居生活に入り、嘉永四(一八五二)年二月二十日



に七十歳で没します。広吉は、実揖の計を知ると、献花・お経料などを届けております。広吉と実揖との関係は、四年間という短いものでしたが師弟の情は深かったと言えましょう。

嘉永三(一八五〇)年、広吉から実揖に届けられた『雲上夢通路』は、父実揖の意を引きついで公正によって、御点がなされたのでしよう。また実揖は、自分の歌仲間、というよりも先輩の高松宰相へと家司に命じ、唐橋御殿の桂判司を通して、広吉のことを紹介したり、彼の才能を慈しんでいたのではありません。

ここに高松宰相とは、権中納言正二位の公祐(安永四年(嘉永四年 一七五三)のことで、公祐には「高松公祐卿詠」が残されております。なお高松家は、武者小路家の庶流になります。唐橋御殿は、文章博士・正三位の唐橋在久で、桂判司は唐橋家の家司ではないかと思えます。

嘉永四(一八五二)年以降は、「憂悶の世界から風雅に逃避した広吉のすがたを窺い見る」(高田 前掲書)こともできない「産業のいとまあらぬ」広吉の生活でした。

3 「御点」有浦章、「文」吉岡信之

「桜狩り」の詠歌碑により、成貞の交際関係には、町方や在方の有力者である小西直哉、辻村陳質、野沢直通等の商人層また剣持広吉等の名主層を見出せます。小田原藩の藩士について調べてみますと、小田原有信会文庫「有浦文書一〇六」に、差出人・有浦章(元右衛門)の『御点 清水谷 お取次 成貞尼』がありました。ここに御点というのは、詠歌について、その大家に評点を貰うことです。

御点 於取次 成貞尼  
清水谷  
右近衛権中将公正卿  
嘉永三戊午 十二月

有浦章(文化十三年生)は嘉永三(一八五〇)年、三十五歳の頃は江戸詰めで、藩主忠愍(タダナオ)のお側近く

仕えていました。彼はその後、元治元(一八六〇)年の「禁門の変」に際しては、小田原藩の隊長として、京都に出陣、七月十九日には、差出人・三條家御用掛丹羽出雲守並びに三宅左近の「参殿呼出状」によって、皇居に参殿しています。三條家の当主は、実美(サネミ)であり、有浦家の現当主の章氏にお伺いすると、三條実美と親しく面接したと伝承されているとのことでした。ちなみに成貞は安政六(一八五五)年四月没、実美の父実万(サネツム)は同年五月に、幕府の圧力により落飾、十月に没しています。共通の話題になったかも知れません。成貞も三條家ゆかりの人(実美の大叔母)です。

京都にいる有浦と、吉岡信之また岡本秋暉・隆徳との間では、文通が頻繁に行われています。ここには有浦章は吉岡信之の弟で、有浦家に養子に入ったという関係があります。吉岡は、小田原では、著名な国学者・歌人です。また岡本は、剣持広吉の項で述べた画家です。章と成貞との関係は、嘉永三(一八五〇)年の頃にすでにあったのですから、章の兄である信之と成貞との関係は、もっと以前からあったとみたまはうがよいでしょう。過日、高田氏から福住正兄の手控えの中に、吉岡信之より「成貞尼がもとへおくる文」(正兄書)があることを教えられました。



小田原有信会文庫「有浦文書」  
福住正兄「手控え」

過日は御法の三むしろをひらき給へるをりから 長居し侍へりて御読経のいとまをさまたげつるなん罪ふかき

わざなりかし かのたまはせし 早雲寺那の宗祇居士の墓に備ふべき懐旧のうた とりとりかうかへ ものし 侍れどもはこ祢 玉笹みしべき才には文よみうべくもあら されば あしの海のあしかるふしは三筆加へたまはんことを 玉かけ山のかけで 願ひ参らせ侍りぬ 近きにものぼりて まのあたり聞文まほしく思ひたまひつれと とにかくにさわらう事のみにて心尽も えまかせ侍らぬ者 はいなきわざなりかし おめしとれと たまひそ 日にそへ 寒さもまさる頃なるを 道のたにいとひたまわんことを 祈り参らせ侍るわなん

中野敬次郎氏の著述の中から、「国学の導入と和歌の流行」、「明治時代の和歌の隆盛」を要約して、当時の小田原の動向をみますと、「信之は号を檀園と称した人。早くから江戸で千葉葛野について国学と和歌を学び、小田原に帰ってから水善舎という家塾を起こして門人を養成したが、入門者数百人に及んだ。信之はまた藩校集成

### 北村透谷と交友のあった

## 紅蓮洞 坂本易徳 ②

### その挫折の人生

岡部 忠夫

坂本易徳の経歴については、彼は自分のことをあまり記さなかったで、明らかでない点が多いが、彼の「故北村透谷」と題した談話(明治三十九年歳第十号『明星』)の中で、僅かながら知ることが出来る。その冒頭には彼が北村透谷と旧同藩人であることを述べており、まず、旧小田原藩人であったことが知られる。

以上は、一三五号に載せた末尾の部分であるが、彼の談話は、透谷が小田原に住んだ、明治十一年から十四年春にかけての消息を伝える唯一の文献である、といわれている。それは同時にまた易徳の経歴の一端を知ることが出来るもので、その談話やその他の資料で、まず、易徳の小田原時代やその周辺のことを取り上げてみよう。

館において前後四十年間にわたって教鞭をとり、国学・和歌を通じて藩士の子弟の育成にあたったので、その影響をうけて小田原地方の幕末は十分庶民を通じて和歌が流行し、鈴之屋(本居宣長)系統水善舎の新古今調が風靡した。……幕末に一世の宗流と敬仰された信之は、明治七(一八四二)年まで、また信之の高弟の蛙園主人福住正兄は明治二十五(一八六〇)年まで生命を保ち、この兩人がうむことを知らず歌道の振興につとめたので、維新の小田原はことに物情騒然で激動の時であって、そのおおりをうけて、各種の文化面は一時沈滞の時を迎えたにかかわらず歌道のみは少しも衰えを見せず、維新戦争が終わって世情がやや安定するといち早くも隆盛期を迎えて繁栄は明治の中期にまで続いた」

そして、福住正兄と三條実美との間には、つぎのような交流がありました。

蛙園のあるじに蛙を求てて  
早川にすだく蛙を わが宿の  
三條実美

彼の戸籍をみると、慶応二年九月廿四日、小田原町緑四丁目の村岡尚易の二男として出生、明治十年四月、満十歳のとき坂本正武の養子となり、二十五歳の明治廿四年十二月廿八日に分家している。

彼の戸籍の生年月日は、一丁田・宝安寺にある墓石に刻まれたものと一致する。ところが、『日本近代文学大辞典』には、「慶応二年九月?」とあり、疑問符をつけている。何故であろうか……。

江戸時代、乳児を育てるのが難しかったため、町人の間では、丈夫に育つようになってから届出することもあり、実際より二、三

坂井にうつし 聞くよしもかな  
右の御歌たまひけるに  
かしこけれど答え奉る  
福住正兄

早川の蛙の声の かそけきも  
君が聡身に とまるかしこさ  
蛙を奉るにそえて奉れる

玉の御園の 御井にうつさば  
こうした動向の裏には、成貞をめぐっての国学・和歌サロンがあり、そのサロンが足場になって、成貞の「稟性温順貞実頗有丈夫之風」を慕い、人びとの交流が士分・庶民の分け隔てなく、おおらかにされていたことが想像されます。このサロンが幕末・明治中期へと小田原の歌壇の成長・発展を育んだ、母体になったと思います。

ところで、有浦文書『御点』も広吉の『雲上夢通路』も、同じ嘉永三(一八五〇)年です。たまたまでしょうか。この年、高野長英が自殺。小田原藩では海岸にお台場の工事を始めます。藩主忠愍も二十歳になった嘉永元(一八四八)年には、「直書」を側向一同に提示し、自らの施策に取りかかっています。忠貞時代にできた京都と結び付きが、その後弛緩していたのを、「見直そう」・再生させようという動きが、この頃強まったということの表われではないでしょうか。(おの もとお)

は、十五で元服任官するに齢が足りないで、実際生れた年より早く生れたことにして偽って届けた例も見られる。この傾向は、明治になっても続き、続柄や生年月日を変更して届け出された例が、しばしばあったと聞く。

このようなことを踏まえて、『日本近代文学大辞典』には、彼の生年月日に疑問符がつけられているのであろうか? それ

とも他に理由があったのであろうか……。

その点、筆者の瀬沼茂樹氏に照会してみたところ、残念ながら、この八月(昭和六十三年)に亡くなられていた。という訳で、瀬沼氏が疑問符をつけたのは、どのような理由によるものか知る由もないが、あるいは、彼の戸籍を調べてのことなのか?

——彼の戸籍には、母の名が



記されておらず、空欄になっている。母不詳ということになるが……。

しかし、彼の出生に秘密があるとするのは、早計である。

「――出生に疑問などありません」

と、言われる方がいる。

それは、秦野市に住む田村うめさんで、うめさんの祖母は、易徳の妹、つまり、うめさんにとって易徳は大伯父にあたる。うめさんの祖父は、旧小田原藩士の出である。

「子供の頃、よく易徳さんに可愛がられました」

という思い出を持つうめさんは、明治四十四年一月十六日の生れ、今年で七十八歳。齢よりずっと若く見え、元気で、記憶力も確かだ。

思い出に残る大伯父易徳は、うめさんが、五、六歳になった以後のことと思われ、大正五、六年以降のことであろう。易徳にまつわる話は、うめさんは、うめさんの母かつさんからも聞いており、いろいろ興味深いエピソードもあるが、このことは後に廻すとして、一訂正して置きたいことがある。

それは彼の呼び名である。

前回、易徳を「えきとく」とルビをつけたが、うめさんによると、「やすのり」さんと呼んだ、と言われる。「えきとく」

と漢読みしてしまったが、『函東会報告誌』にE・Sという略号で記した文は坂本易徳がかいたものと思われ、また、東京近代文学館の検索カードには、「サカモト・エキトク」と、載っているからである。

このように、名前を訓読みするの本来であるのに、音読みする例は、しばしば見受けられる。例えば、二宮尊徳(たかのり)がそうである。もっとも、易徳の場合、知名度は低く一般化した読みではないが――。

ところで、坂本易徳の戸籍で母が不詳な点は、元首相吉田茂と似ている。

吉田茂は、明治十一年九月二十二日、土佐自由党の志士として名高い竹内綱の五男として生まれ、同十一年四月、横浜の貿易商吉田健三の養子として、吉田家に入籍しているが、戸籍で母の不詳となっている。そのため吉田茂は正妻の出でないかもしれない、という説があるが、これに対し、母が不詳であるのは、当時は、むしろ普通である、という反論がある(猪木正道)『評伝吉田茂』。

ともあれ、戸籍の母の不詳など、現在では考えられないことだが、明治という時代は、そのようなことを容認する、大まかさというか、そんな心裡的空間があったのかもしれない。

次に、易徳の出生地についてみると、彼自身は、「私は江戸で生れたものですが、年齢に達した頃は最早一家は郷里(小田原)に引き移った後のことでしたから、其處の小学校に入学しました」

と、語っている。

一方、小田原市浜町一丁目の宝安寺にある、彼の墓石には、先に記したように、「相州小田原生」とある。

しかし、この墓石の「相州小田原生」を、直ちに誤りとするには、ちょっと、ためらいがある。

それは、易徳の墓石建立の肝煎となった「小田原保勝会」というよりは、保勝会の活動の推進役となった、旅館小伊勢屋の先代、尾崎亮司の名が浮んでくるからである。

彼は、旅館の傍らに本屋を開き、「小田原の史実と伝説」を発行し続け、また、昭和二年、小田原城址二の丸外堀埋立反対運動の立て役者であった。それに、今は城址公園にある北村透谷顕彰碑の建立を推進している。

その尾崎が、易徳が小田原に住んだのは少年期から青年前期の十年ぐらいの間であることを、承知していた上で、なおかつ、「紅蓮洞は小田原の人である」と言うような剛腹さで、郷土を愛し、情熱を傾けたような人物

のように思えるからである。ちょっと、焦点を尾崎亮司に当てすぎた感じだが、そのことはさて置いて、

易徳の談話に基づいて、瀬沼氏は、『日本近代文学大辞典』に、彼を、江戸生れとして執筆されたのであろう。

しかし、彼が江戸で生れたとすると、ちょっと考えなくてはならぬ点がある。

彼の実父村岡尚易は、小田原藩士で、安政五年(一八六六)の『順席帳』によると、欣五兵衛門正久を名乗り八十石。川村闕所(山北町)御番を勤め、居所は手代町、今の小田原市栄町二丁目二六番あたりである。

それ故、尚易は、安政五年以降江戸詰に変わったと解しなければ辻褄が合わなくなる。それで尚易が江戸詰になった、という前提のもとに話を進めたい。

正久改め尚易。

明治維新後、旧小田原藩士には、尚易のように改名した者がかなり見受けられる。

小田原藩士には、戊辰の役で官軍に抵抗したため、旧藩士は再就職に際し、不利益を受けないうように、前歴をばややす必要があった、と、見る向きもある。

このことは、ともかくとして、易徳の一家が東京から小田原に戻ったのは、尚易が小田原で小学校の教師となるためと思われ、

その時期、易徳は満六歳に達した、明治五年(一八七〇)か六年の始めの頃と推定される。

尚易は、文政十一年(一八二八)六月十四日生れて、この頃、四十四歳前後の齢で、東京での生活が思うようにならず、見切りを付け、小田原に引揚げたのであろう。

この時期、明治維新政府は、「邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス」と、学制を布告、小学校教育の義務化の方針を示している。

正確には、明治五年八月三日(陽曆九月五日)の事である。翌六年四月になると、各地に小学校が開設される。校舎は、殆どが寺院や家屋を借受けての発足であった。

「当県管下相州官立小学校教員名簿」(岩瀬家文書)によると、小学校数は、支校(分校)を含めて百三十二校、教員数三百九十名、一校当たり平均教員数三名弱で、その規模の程が知られよう。

教員のうち、旧小田原藩士であったものが、かなり多くの数を占めている。明治四年の廢藩置県で失業した武士に取っては、とりあえず教員となるのが手近な道であった。

なお、岩瀬家文書の当県とは、当時足柄県と呼ばれた時代のことである。明治三年六月十九日

(陽曆五月二十七日)小田原県を設置。ところが矢継早やに、同年十一月十四日(陽曆十月二日)小田原県を廢して足柄県を設置している。それは、官軍にそむいた朝敵藩として、藩名を使わせないで、郡名を付けた、とする見方がある。考え得ることだ。

村岡尚易がつとめた小学校は、第五十一番有禎館である。有禎館には、第一支校(湯本)、第二支校(畑宿)、第三支校(箱根)、第四支校(底倉)、第五支校(仙石原)の五つの分校があったが、尚易が勤めたのは、本校(小田原市立大窪小学校の前身)で、当初、板橋の香林寺が校舎として使用された。

のちに、易徳の養父となる坂本正武も旧小田原藩士で、六十七石。第四十六番小学崇広館の

教員となったのは、満三十三、四歳の働き盛りと推定される。崇広館には、本校の他に第一支校(小田原市立山王小学校の前身)、第二支校(小田原市立酒匂小学校)、第三支校(小田原市立下中小学校)の三つの分校があったが、坂本正武が勤めたのは、本校(小田原市立前羽小学校)である。

ついでには、当時、小学校教員の給料は、どの位の額であったろうか。

崇広館の出納簿(「舟津家文書」)に載る、明治八年十一月の教員給料の最高は三円五十銭である。なお、坂本正武の名は見当たらない。彼は既に止めていたと思われるが、その後の動向は分からない。

小田原の小学校で、一番古い歴史をもつ日進館(小田原市立本町小学校の前身)の、明治五

年の教員の月給の最高は、五円であった。当時、小学校教員の給料は、現在のように、国・県によって賄われるとは異なって、全額地元の負担によるものであった。崇広館と日進館の給料の差は、住民の負担力の差から生じた、とするには、データが少なすぎて、速断の恐れがあるが、それにしても、明治五、六年の小学校教員の給料は、多くても、五円を越える事は、なかったと思われる。

この五円どまりの月給で、一家の生活をどの程度まかなえたものであったろうか。

『明治小田原町誌』の、明治七年二月の項に、「米価壹俵に付金貳円五拾銭となれり」とある。五円で貳俵買えた計算だ。これを現在の米価と比較して換算すると、五円は、五万円前後

となる。もっとも、当時は、作・不作によって米価は大いに変動するのに対して、現在の米価は管理価格であり、また、多様化した生活の中で、米だけで価値を比較するのは、適当ではないが、大まかな見当はつく。明治七年、東京での巡査の初任給(基本給)は四円で、他に現物支給の官服と、現金支給の靴代が出ている(『値段の風俗史』)。地域差があるにしても、五円の月収で家族を養っての生活は楽でなかったといえよう。

明治七年十二月発行の『新聞雑誌』は、「最近一覽あほだら経」と題して、その辺の事情を伝えている。

当時一新、よくも替った。武芸はずたるし、大小は三文、エビシは読まれずあせりあせって、仕官と出かけ、

余談ではあるが、財界引退後、大窪村(小田原市)板橋に住んだ、三井物産の創始者益田孝、彼は、昭和九年一月、富士写真フィルム株式会社が、南足柄の地に創立されるに当り、大いに陰の力になったと伝えられているが、かつては、幕府の騎兵頭並(陸軍中佐ぐらゐに該当したという)を勤めた幕臣である。

その彼が・明治維新後、巧みに転換して、実業界に雄飛するようになったのは、その資質もさることながら英会話を身につけていた事も、大いに役立っている、と思われる。彼は、幕末

横浜鎖港の交渉で、遣欧使節団の会計係として派遣される父の家来という名目で、渡欧のチャンスをつかみ、ヨーロッパの文物を自分の目で確かめ、英語を勉強する切っ掛けを得ている。

# 平成元年度総会

## 会員部新設 新編成予算

平成元年四月十六日(日)に平成元年度の事業計画、十三時三十分より小田原市 収支予算及び組織改正が承立郷土文化館において開催 認され、次に、前会長杉崎昭和六十三年度の事業報告 正五氏並びに事務局を辞任 田喜久三) 決算報告、監査報告、並びの沖山敏子氏に対して感謝

- 状を贈呈。引続いて、立木 講演会 座談会 その他
- 望隆氏による「小田原と北 (和田登)
- 条早雲」の講演が行われた。 会報部 会報発行と配送
- 組織改正に伴う仕事の分担 (岡部忠夫)
- は次の通り。 会計部 現金出納・決算
- 事務局 外部よりの文書 予算 (富田千春)
- 取扱、各部との連絡(下川 カッコ内は担当責任者
- 茂三郎) 新年度予算は、組織の各
- 会員部 会員名簿の整備 部毎に新勘定科目により予
- 会費徴収 入脱会記録、加 算を配分。
- 入促進 会員との連絡(高 事業報告、決算報告、事
- 田喜久三) 業計画、収支予算及び組織
- 企画事業部 歴史探訪 は次の通り。

等外六等、五円の月給、どうして堪るか九人の眷族。米櫃空っぽで、おなかはべこべこ(以下略) 「エビシは読まれず」とは、ABC、つまり英語が出来ないということ、当時は、英会話が出来れば、大いに活躍の場が与えられた時代

(続)

平成元年度編集委員会予算  
(会報特別会計)

区 分	予算額
(収入の部)	円
前年度繰越金	349
一般会計より	354,000
特別賛助会費	540,000
預金利子	351
合 計	894,700
(支出の部)	
会報印刷費	745,000
編 集 費	106,000
会報発送費	33,700
事務用品費	10,000
合 計	894,700

平成元年度予算(一般会計)

(収入の部)

区 分	予算額	摘 要
前年度繰越金	52,949	
会 費	910,000	364人分
小田原市補助金	24,000	
利 息	4,051	
合 計	991,000	

(支出の部)

区 分	予算額	摘 要	
庶 務	総 会 費	27,000	葉書その他
	会 議 費	12,000	葉書その他
	会 員 連 絡 費	90,000	葉書
	交 際 費	50,000	慶弔その他
	名 宛 印 刷 費	66,000	ラベル
	事 務 用 品 費	10,000	
	計	255,000	
会 員	会 員 名 簿 印 刷 費	62,000	
	計	62,000	
企 画 事 業	調 査 費	50,000	歴史探訪下見
	講 演 会 費	40,000	講師謝礼
	懇 談 会 費	10,000	
	計	100,000	
会 報	会 報 費	354,000	会報特別会計
	会 報 配 布 費	96,000	普通会員分
	計	450,000	
会 計	事 務 用 品 費	5,000	
	計	5,000	
予 備 費	119,000		
合 計	991,000		

- 昭和六十三年度事業報告
- ◇六十二年四月廿四日(日) 定期総会(市立郷土文化館)大木靖衛氏講演「西相模の地震について」
- ◇五月二十八日(土) 曾我城前寺傘焼供養祭参加(理事)
- ◇五月二十九日(日) 三十日(月)
- 水戸、五浦方面史跡めぐり
- ◇七月二十四日(日) 湯河原方面史跡めぐり
- ◇九月十一日(日) 鎌倉方面史跡めぐり
- ◇九月十八日(日) 尊徳祭出席(理事)
- ◇九月二十三日(金) 久野古墳祭出席(理事)
- ◇十月十六日(日) 十七日(月) 上州方面史跡めぐり(中止)
- ◇十一月十二日(土) 講演会「インダス文明の現地を訪ねる」講師奥津福太郎氏

平成元年度事業計画  
一、講演会 二回

会報発行  
第一三三号〜第一三六号  
の四回発行 編集委員会十回開催

理事會  
4/8 8/10 9/12 9/14 9/25 9/31  
計十三回

三島方面初詣  
◇三月二十六日(日) 「中野先生を偲ぶ会」於 松永記念館(理事四名)

二、歴史探訪  
県外一泊一回  
県外近郊日帰り三回  
三、座談会開催(新規)  
四、会報発行  
五、会報発行(新規)  
監査委員 西山 登太郎

昭和63年度収支決算書

区 分	決 算 額
(収入の部)	円
前年度繰越金	51,576
会 費	910,000
特別賛助会費	540,000
補 助 金	24,000
利 息	4,844
雑 収 入	20,000
計	1,550,420
(支出の部)	
会 議 費	11,870
会報印刷費	741,000
会報送料	128,370
編 集 費	102,200
通 信 費	137,370
講 師 お 礼	48,000
交 際 費	42,480
事 務 用 品 費	45,832
事 務 手 当	240,000
雑 費	
次年度繰越金	53,298
計	1,550,420

昭和63年度史跡めぐり収支決算書

月 日	名 称	人員	収入額	支出額
S63. 4. 1	前年度繰越金		209,997	
5. 29	茨城県北部	名		
5. 30	史跡めぐり	29	667,000	668,100
7. 24	湯河原方面	56	112,000	100,970
9. 12	鎌倉方面	40	120,000	104,860
10. 16 ~17	上州方面	0	0	4,900
H1. 1. 22	三島方面初詣	35	177,000	164,300
	利 息		4,054	0
3. 31	次年度繰越金			246,921
合 計			1,290,051	1,290,051

### 特別賛助会費

六十三年度決算報告書の収支のうち会報の発行に当てられた金額は下欄の通りです。

特別賛助会費(一口一万円)五十四万円は四十三社の協賛によるもので内は次の通りです。

### 特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店  
 小田原銀座 アオキ画廊  
 足柄香粧株式会社  
 飛鳥屋  
 紳士服の **アメリカヤ**  
 画材 ガクブチ **ゆうえ**  
 伊勢治書店  
 ⑤ かまぼこ  
 株式会社 江島  
 株式会社 小田原魚市場  
 ⑥ **小田原ガス**  
 小田原信用金庫  
 小田原報徳自動車  
 株式会社 オートセンター・スギヤマ  
 ⑦ 小田原中央青果 株式会社  
 かまぼこ 籠 清  
 令 学 苑  
 鐘紡株式会社小田原工場  
 カネボウ化粧品鴨宮工場  
 興 電 社  
 ⑧ 清水甘納豆  
 ⑨ 正 栄 堂

鈴木 廣 木まほこ  
**辰寿堂スポーツ**  
 大 営 不 動 産  
 割烹 おる海  
 ⑩ そびそ二 宮  
 茶半家具株式会社  
**ちんぎょう本店**  
**角田ガクフ子店**  
 株式会社 東 華 軒  
 八 小 堂 書 店  
 八 子 マ サ  
 平 井 書 店  
 富士写真フィルム製小田原工場  
 株式会社 **報 徳 屋**  
 松 坂 **マルク**  
 学生専科 ⑪  
 食器の店 マルサンストアー  
 株式会社 **美濃屋吉兵衛商店**  
 スーパーマーケット 株式会社 **ヤオハサ**  
 山 口 菓 子 舗  
 湯浅電池 株式会社 小田原工場

＜収入の部＞	
前年度より	136円
一般会計	354,000
特別賛助会費	540,000
預金利子	369
合 計	894,505
＜支出の部＞	
会報印刷費	741,000
編集費	102,200
会報送費	32,690
事務用品費	18,266
次年度へ	349
合 計	894,505

三口 鐘紡(小田原工場) 富士フィルム(小田原工場) 二口 足柄香粧(小田原) 田原ガス(小田原) 金庫 小田原中央青果(カネボウ化粧品)鴨宮工場 ヤオハサ 湯浅電池 (小田原工場) 七社 一口 三十三社

支出のうち 会報印刷費

はNo.一三三(一三六号)の四回分です。会報発送費は、特別賛助会員の外寄稿者、役所、学校(小・中・高)、図書館などへの郵送料です(近くは直接お届けしています)。編集委員一同努力しておりますので、よろしく今後とも御支援、お力添え下さるようお願い申し上げます。

お蔭様を持ちまして、充実した内容の会報の発行ができました。会報は、小田原の文化の一端を担うものだという意気込みで編集委員一同努力しておりますので、よろしく今後とも御支援、お力添え下さるようお願い申し上げます。

### お知らせ

◎本年度から、本会の連絡所が次のように変更いたしましたので、お知らせ申し上げます。

小田原市本町一丁目六番二〇号  
 相澤栄一会长宅  
 電話(24) 三〇三〇

◎会報は従来郵送でしたが、本年度から地区で会費を集金されている方々の御協力で、直接配布することになりました。集金される方のいない地区では、従前通り郵送です。

### 会員情報

◎企画事業部長の和登氏、春の叙勲で勲四等瑞宝章を受賞。おめでとうございます。◎理事の飯沼恒雄氏、住所を小田原市栄町四〇九〇八に、同じく中野寿美子氏、小田原市南鴨宮三二四一四に、それぞれ変更。